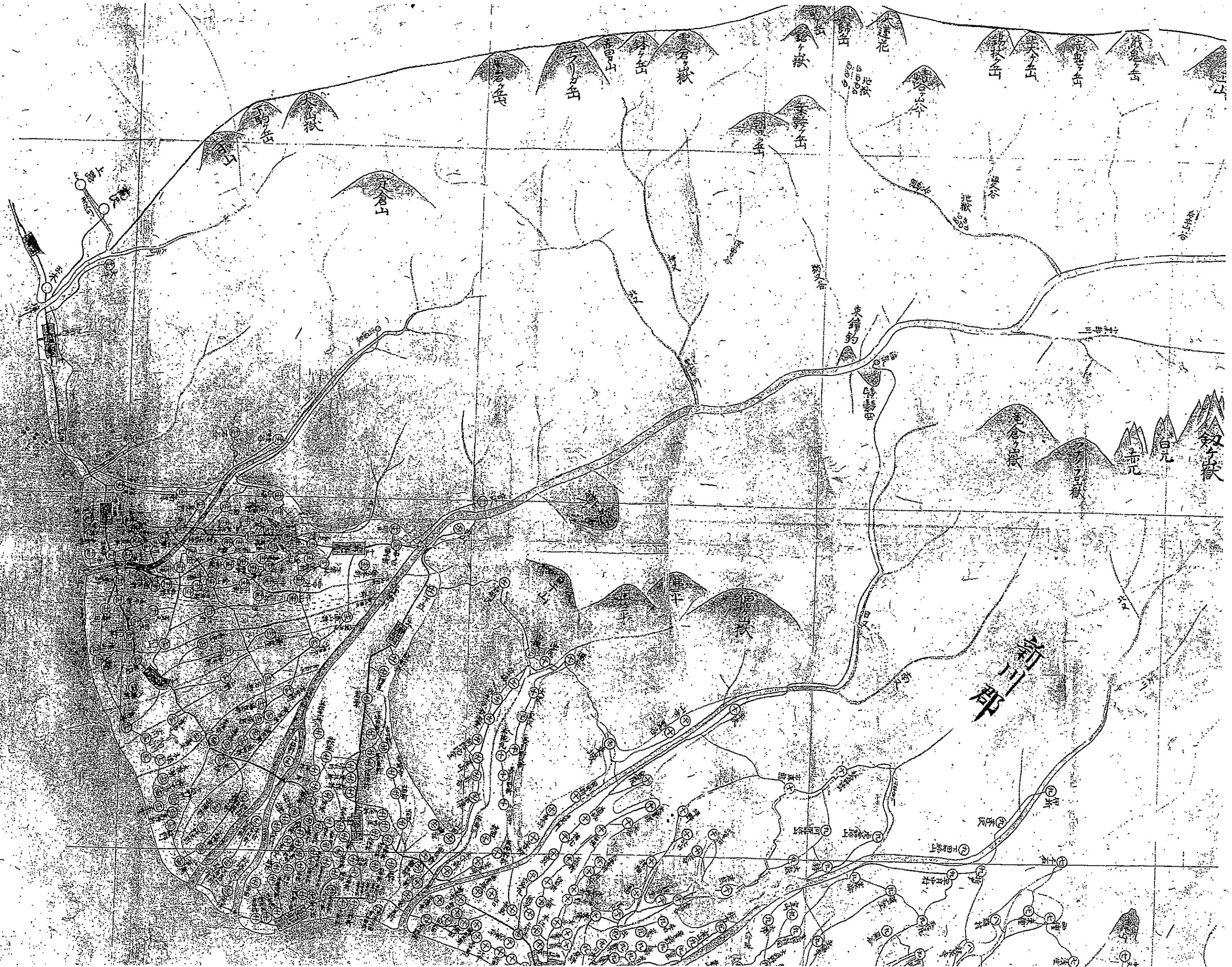


青色、江河、海
 文徵八年乙酉四月
 射水郡
 那境

新編 日本書紀卷之六十五 四二二





越中国四郡村々組分絵図 (国指定重要文化財)

原図 文政8年(1825)4月
石黒藤右衛門(信由)測量 作図
分間(縮尺):1里1寸8分(72,000分の1)
法量:138.0cm×144.5cm
所蔵:財団法人 高樹会

この絵図は、江戸時代後期の測量家石黒信由(1760~1836)が測量に基づいて作り、当時の越中国(富山県)の大部分を支配していた加賀藩に提出した絵図です。

信由は、加賀藩領の越中国射水郡高木村(射水市高木)の村役人の家に生まれました。信由は、射水郡出身で平安時代の日本を代表する算学者 三善為康(1049~1139)にならい、若いころから和算・測量・天文暦学・航海術を修めました。

享和3(1803)年8月3日、日本全国を作製するために越中を測量していた伊能忠敬を放生津(射水市)の宿に訪ねた信由は、忠敬の使っていた測量用磁石「ワンカラシン」に関心をもち、翌日の測量に同行してその測量のようすを見学しました。

文政2年(1819)年、信由の測量・絵図作製技術を認められた加賀藩は、信由に越中国(富山県)、加賀国(石川県南部)、能登国(石川県北部)の製作を命じました。信由の作った絵図の精度は非常に高く、現在の国土地理院が製作する地形図とほとんど変わりません。

この絵図は、越中国の絵図として、当時の町や村々がすべて描かれています。また、加賀藩独自の行政組織である十村組の所属が記されています。十村組は、10~50村によって構成され、農民階層の十村(大庄屋)が支配していました。